

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：21201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20791731

研究課題名（和文） 死産体験後に、妊娠・出産する女性への看護支援に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental study for nursing support to women who become pregnant and give birth after experience of stillbirth

研究代表者

木地谷 祐子 (KICHIYA YUKO)

岩手県立大学・看護学部・助手

研究者番号：60468113

研究成果の概要（和文）：死産後、次子を妊娠・出産した女性の体験を明らかにし、具体的な看護支援について検討することを目的に研究を遂行した。女性達は、常に我が子を失ってしまうのではという不安を抱えていた。また、女性を取り巻く父親、看護者も苦悩を抱えていたが、互いを気遣いその苦悩を積極的に他者に明かすことはなかった。以上より、次子を妊娠・出産するまでを一連のプロセスと捉え、各人の思いを尊重した継続的な支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We were engaged in the study aiming for clarifying the experience of females who became pregnant and gave birth after stillbirth and examining the detailed nursing supports. The women in this study were holding a concern to lose their babies on a consistent basis. In addition, husbands and nurses surrounding the women also held distress but they could not actively reveal their distress to others due to caring each other. From the above-mentioned descriptions, it was suggested that a necessity of continuous support by respecting each person's consideration was understood as a series of process until pregnancy/childbirth for the next child.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000円	150,000円	650,000円
2009年度	500,000円	150,000円	650,000円
2010年度	0円	0円	0円
2011年度	300,000円	90,000円	390,000円
年度			
総計	1,300,000円	390,000円	1,690,000円

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：看護学, 死産, 妊娠, 悲嘆, 家族

1. 研究開始当初の背景

女性の 5 人に 1 人が周産期の喪失(流産, 死産, 新生児死亡)で子どもを亡くす。我が国における周産期の喪失に対するケアは, 体験者の声を通じ 2000 年に入りようやく看護支援の検討が開始され, 現在も構築段階である。研究活動, 自助グループからの提言により, 入院中のケアは過去 10 年間で家族の思いに寄り添ったより望ましい方向へと改善されてきた。しかし, 多くの研究で退院後の支援が課題として取り上げられているように, 産後 1 ヶ月健診以降に家族が医療者の支援を受けることは難しく, グリーフ・ワークが本格的に始まる時期に支援を受けられないというのが現状である。

退院後の支援を十分に受けられない中, 地域に戻った家族は自分達でグリーフ・ワークをこなし, その過程で時期の長短はあれ, 次の妊娠にチャレンジしようと意思決定する。この分野の研究が非常に先進している欧米諸国においては, 次子妊娠中の漠然とした不安や懸念, 胎児への愛着抑制などの特徴が報告されている。このように次子の妊娠は一概に喜びに包まれたものではなく, 女性達はいざ妊娠してはじめて, 前回の妊娠時とは異なった自身の気持ちの不安定さに苦悩するのである。死産を含む周産期の喪失を体験した女性の 8 割以上が, 次の妊娠を考えるという現状が報告されているにもかかわらず, 我が国において死産体験後に次子を妊娠・出産した女性の看護をする上での方法論はいまだ確立されていない。

以上より, 退院後の継続ケアが確立していない我が国で, 子どもを亡くしたあと, 次子の妊娠・出産を体験した母親達の体験の様相を把握することは重要な課題であり, 次項に記す研究目的を設定し, 調査を実施した。

2. 研究の目的

本研究では, 死産後, 次子を妊娠・出産した女性の体験の様相, および女性を取り巻く父親, 看護者の対応の現状を把握し, 効果的な看護支援を検討することを目的とする。その具体的な目的は以下の 4 点である。

- (1) 死産体験後の女性の「次の妊娠」における妊娠・出産体験について明らかにする。
- (2) 死産体験後の女性が, 実際に体験した看護支援について明らかにする。
- (3) 死産体験後の女性の妊娠・出産に関わる, 看護者の対応の現状について把握する。
- (4) 死産体験後の女性の, 「次の妊娠」に対する看護の課題を明確にする。

3. 研究の方法

(1) 研究目的(1)及び(2)について

- ・研究対象者: 死産, 新生児死亡で子どもを亡くした後, 次子の妊娠・出産を体験した女性である。対象者の選定にあたっては, 流産・死産・新生児死亡で子どもを亡くした自助グループに協力いただく。
- ・研究内容・方法: 死産, 新生児死亡で子どもを亡くした後, 次子の妊娠・出産を体験した女性に対し, 体験の様相や当時の思い, 実際に体験した看護支援について把握する。そのため, 方法は半構成的面接法を選択し, 女性の体験を詳細に記述する。面接の実施に関しては, 対象者の希望を第一に優先し計画する。
- ・分析方法: 面接終了後, ただちに面接の際に観察したことを加えて文章化する。その後, 時系列に整理し, 女性の体験及び思いの変化, 受けた看護支援に留意しながら該当する文脈を抽出し, 体験の様相について把握する。

- ・倫理的配慮：研究対象者に対し、研究の趣旨、研究参加の自由意思、途中辞退の自由、プライバシーの保護、研究データの保管・破棄方法、学術誌への研究結果公表の可能性について、文書を用いて説明する。

(2) 研究目的(3)について

- ・研究対象者：死産、新生児死亡で子どもを亡くした後、次子の妊娠・出産を体験した女性に関わった経験をもつ助産師。対象者の選定にあたっては、分娩を取り扱っている産科医療施設の看護部門の代表者に調査協力を依頼し、紹介を受けた。
- ・研究内容・方法：女性に関わる助産師の体験の様相を把握する。方法は研究目的(1)(2)と同様の半構成的面接法を用いる。
- ・分析方法：上記に記した研究目的(1)(2)と同様の手順を踏んで、分析作業をすすめる。
- ・倫理的配慮：上記に記した研究目的(1)(2)と同様である。

(3) 研究目的(4)について

- ・考察の過程で浮かび上がった女性のパートナーである父親がその体験に及ぼす影響を考慮し、新たに父親の体験の様相を把握するための調査を追加で実施した。対象者の選定、研究内容・方法、分析方法、倫理的配慮については研究(1)(2)(3)と同様である。以上より、研究目的(1)(2)(3)の結果をもとに考察を行う。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究を遂行した結果、女性達は常に我が子を失ってしまうのではないかという苦悩を抱え、不安と希望が交錯した複雑な心境の中で妊娠生活を継続していたことが明らかとなった。その揺れ動く様相は、家族や知人、身近な出来事から影響を受けていた。そのよ

うな中、女性達は直面した出来事を自分なりに意味づけし、亡くなった子が残してくれた命の意味を見出そうとしていた。また、女性をとりまく父親、看護者を対象にした調査では、両者それぞれが苦悩を抱えていたことが明らかとなった。母親を気遣うあまりその苦悩が積極的に他者に明かされることはなく、個々の胸の内に隠されていた。以上より、死産後、次子を妊娠・出産するまでを一連のプロセスと捉え、各人の思いを尊重した退院後の継続的な支援の必要性が示唆された。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

周産期の喪失は家族の発達危機である。海外の研究では、母親が父親に求めるサポートと父親が提供するものとの間に差があり、夫婦間で葛藤が生じることが報告されている。また、アメリカでは周産期の喪失を体験した夫婦の離婚率は80%にのぼるとされており(アメリカでの最初の結婚の離婚率は50%)、子どもの喪失が家族に危機的状況を引き起こすことが読み取れる。

しかし、現在、周産期の喪失を体験した家族への看護は、入院中の支援が大部分を占め、グリーフ・ワークが複雑化する退院後の支援の多くが自助グループに任せられ、看護者がその実情を把握する機会が限られているというのが現状である。また、現在のシステムでは、1ヶ月健診後、病院との関わりが途絶えてしまうため、相談システムが機能しておらず、退院後に家族内で起こりうる様々な問題が深刻化する場合が少なくない。

このような現状のなか、本調査における対象者の語りから、死産後の次子の妊娠・出産にあたり、母親そしてそれを取り巻く家族は非常にストレスフルな状況に置かれており、妊娠を決断する以前からの継続した関わりの必要性が示唆された。5人に1人の女性が

周産期の喪失後の妊娠を体験することからも、看護者は過去の産科的病歴を把握し、喪失体験が次子妊娠に及ぼす影響を視野に入れて対象者に関わることが重要である。また、次子妊娠を決断するにあたり、妊娠後に生じうる不安や必要とする情報を提供し、妊娠・出産に関わる事柄をいくつかの選択肢の中から家族の意思で自己決定できるよう支援していくことも有用であると考え。具体的には、妊娠期間中に行われる健診や検査結果に関する事柄を家族が納得するまで説明し、配慮することが、結果的に不安の軽減につながるかと推察する。そして、夫婦が互いを尊重し、より望ましい家族関係の中で妊娠を継続していけるよう、予防的に関わっていくことの意義が示唆された。

(3) 今後の展望

現在の医療現場における周産期の喪失を体験した女性及び家族への看護は、いまだ発展途上であり、長らく退院後の支援の重要性が指摘されているものの、その具体的なシステムづくりに至っていない。したがって、本調査で得られた知見をもとに、次子妊娠を視野に入れた継続支援を困難にしている要因を詳細に分析し、円滑な看護実践につなげるためのシステムづくりをしていくことが今後の重要な課題であると考え。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- 1) 木地谷祐子, 蛎崎奈津子, 遊田由希子: 岩手県における死産, 早期新生児死亡を経験した母親及び家族に対するケアの現状, 第23回日本助産学会学術集会, 2009年3月

21日, 東京都。

- 2) 蛎崎奈津子, 木地谷祐子, 遊田由希子: 岩手県における流産・死産・新生児死亡で子どもを亡くした家族会の活動の評価と今後の課題, 第23回日本助産学会学術集会, 2009年3月21日, 東京都。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木地谷祐子 (KICHIYA YUKO)

岩手県立大学・看護学部・助手

研究者番号: 60468113